



攻防戦



セーラムーンRPG②

おたから攻防戦

深森薫

ここはルナル・シティ、大陸を東西に横切る『銀の街道』沿いの町のうちでも都会の部類に入るとある。その一番賑やかな大通りを東へ外れた路地に店を構える『青旗亭』は、旅の商人や流れ者の何でも屋が集まる、いわゆる「冒険者の店」としてその筋では知られている。

「あふう……おはよ」

生あくびを噛み殺しながら、ジュピターの長身が二階から現れた。鎧も着けず、無造作に束ねた栗色の髪をぼりぼりと掻きむしるこの緩みきった恰好を見て、彼女が実は強者の戦士だなどと誰が信じようか。

「答えたのは、壁際の席に陣取っていた二人連れ。」

「お早う」

微笑んで穏やかに言葉を返すマーキュリー。神官の身分を示す胸のペンダントには、知識の神ラーダの聖印が刻まれている。すでに神殿で礼拝を済ませてきた彼女は、聖職者らしく法衣をきちんと着込んでいた。

「お早う、つてねえ。もう昼よ」

そうツツコミを入れるのはマーズ。魔術師にして精霊使い。黒のローブに身を包み、黒い瞳に長い黒髪がミステリアスな雰囲気醸し出している超絶美形。

「ああ、昼ね……何食べようか、昼飯」

ジュピターはそう言ってテーブルに着くと、持っていた剣を隣の椅子に置いた。『片手半』^{バスタード}と呼ばれる大振りの剣はごとりと重そうな音を立てる。どんなにリラックスしていても剣は手放さないあた

り、まあ立派といえよう。

「私は軽くていいわ、さっきお茶を飲んだばかりだし」

答えたのはマーキュリー。

「あたしは……そうだ、昨日マーキュリーが食べてたやつ。あれ、何だっけ」

「お多福エビのグラタン？」

「そう、それそれ。……んつと、それから、山バトのスパイス焼きと、野菜たっぷりスープと、ベークトポテト」

「それだけ？」

「うー……うん、起きたばっかだし、いまいち食欲ないんだよな」

「あ……」

二人のやりとりを端で聞いていたマーズが、頭からテーブルに突っ伏す。

「マスターっ！ 注文お願いっ！」

そんなことには構わず、ジュピターはカウンターの奥の店主に向かって声を掛けた。

*

「あのう……もし」

注文した料理がテーブルに並んだ頃。

声をかけたのは、初老の男だった。顔には幾分皺が目立ち、黒い髪と髭には大分白いものが混じっているが、きりりとした眉に鼻筋の通った精悍な顔立ち、若い頃はさぞかし美男子でならしたことだろう。ここ二、三日この店に通って来ては日がな一日茶を飲みながらマスターと話し込んで帰って行く暇人である。

「腕の確かな方々とお伺いして、折り入ってお願ひがあるのですが。……おお、申し遅れました、私はハリソン・マッカートニーと申します」

身なりはごく普通の市井の老人風だが、そう告げる口調と物腰にはそこはかたない品がある。椅子を勧められた彼は軽く会釈をして腰を下ろすと、早速本題に入った。

「実は私、この町のとある屋敷に長年仕えております執事でございます、主人の命で、信用のおかげのような冒険者の方を探しておりました。……皆さんは、ここ一月ほどこの町を荒し回っている盗賊の話をご存じではありませんか？」

「……ええ、噂程度には」

「小耳にはさんだことは、あります」

「んー、そういえば、聞いたな、そんな話……」

口々に言っただけで、聞くマーズとマーキュリー、何とか思い出そうとするジュピター。

「富豪の邸宅ばかりを狙って、書画骨董や宝石を頂戴するとか、」

「怪盗気取りで、仕事のあとには必ず『V』の署名を残していくとか」

トークは二人に任せることにして、ジュピターはグラタンのお多福エビをつついた。

「ええ、その通りです」

マツカートニー氏はゆるりと頷いた。

「賊は神出鬼没なうえ誰もその姿を見た者はなく、その正体は全くの謎。官憲もすっかり手玉に取られてお手上げだとか。」

そこで、あなた方に当屋敷の警備をお願いしたいのです。正式に依頼するかどうかは当家の主人の判断になりますが、とりあえずお話を聞いていただけますでしょうか？」

「……悪い話——では、なさそうだけど……？」

マツカートニー氏の問いに、マーズはマーキュリーに視線を送った。

「ええ……断る理由は、ありませんが……」

マーキュリーはジュピターに視線を送り、ジュピターは、

「……いーんじゃない？ まあ、任せるよ」

グラタン皿の底をスプーンでこそげながら軽く答える。

「そういうことです。この話、お受けしましょう」

マーズはやれやれという風に肩をすくめ、とりあえず皆の代表としてはつきりと答えた。

「……ありがとうございます」

承諾の返事に相手を崩し軽くお辞儀をすると、さっと席を立つマツカートニー氏。背筋のぴんと伸びた立ち姿は、確かに良家に仕える者のそれらしい。

「では、早速ですが、屋敷の方までご足労願えますでしょうか。私が、ご案内申し上げます」

*

マッカートニー氏に案内されて一行がやって来たのは、シテイの南の『アビイ通り』と呼ばれる界限だった。シテイの住民でも比較的裕福な階層の多く住まうそこは、道路沿いに伸びる高い鉄柵、その間から垣間見える庭の緑、豪華な屋敷などが独特の風景を作っている。

やがてマッカートニー氏はそのうちの一つの前で立ち止まった。

「こちらが当家の屋敷です」

そう言って彼は鉄のアーチの下をくぐり抜けて中に入ってゆく。丁寧に刈り込まれた芝の中、浮き彫りのように白く敷かれた石畳のアプローチを、冒険者の一行もぞろぞろと後に続く。玄関先まで来ると、執事氏はドアの傍らに下がったチェーンを引いた。銀製のチェーンである。呼び鈴の音も何か品よく涼しげに聞こえる。ほどなくして重厚な扉が開き、若いボーイが応対に現れると、老執事は彼に客人の案内を委ねて屋敷の奥へと引き込んでいった。

「では、ご案内申し上げます、どうぞ」

礼儀正しくよく教育されたボーイに促され、三人はホールの中へ歩を進めた。緩やかな弧を描いて二階へと続く階段。足下には柔らかなカーペット。高い天井には陽光を受け七色に輝くクリスタルの天窓。

紛れもない、金持ちの屋敷である。

「こちらでございます」

そう言ってボーイは左奥の扉へと客人を招く。

『ね、ね、マーキュリー？』

ジュピターはおどおどと、ボーイに聞こえないよう小声でマーキュリーを呼び止めた。

『……なに？』

『靴のまんま踏んでいいのかな、このカーペット』

『つたり前でしょ、んなこと聞くんじゃないわよ恥ずかしいわね』

二人の後ろについて歩いて歩いていたマーズが代わりに答える。

『あんだよ、そんな言い方ってー』

『とにかく。あんまり貧乏くさい真似はやめてよね』

『なんだとおお！』

『なによ、ほんとのことでしょ！』

『あの……何か？』

怪訝そうに振り返るボーイ。

『あ、いえ、何でもありません、気にしないで下さい……』

睨み合っているマーズとジュピターを後ろに隠し、マーキュリーは笑ってごまかした。

『はあ、左様ですか……』

いぶかしげに首をかしげながら、彼は冒険者達を客間へと通した。

「やあ、お待たせしました……私が当家の主人、ジョージ・リング・ジョンポールです」

現れたのは、中年の小太りの紳士であった。当主としての威厳の方はともかく、気品の方は顔とスタイルの分三割引くらいであろうか。後ろには執事のマツカートニー氏が、先刻三人をこの屋敷へと連れて来た時とはうってかわって、スタンドカラーのスーツに蝶ネクタイ姿で控えている。

「いやはや、話には聞いていたが、これ程の美人揃いとは」

「……そんなことを言うために私達を呼びつけたのかしら？」

「マーズ！」

「それに——」

あからさまに不快を表すマーズをマーキュリーはたしなめようとするが、マーズは意に介さず言葉を続ける。

「まるで前から私達のこと知っていたみたいじゃない……気に入らないわね」

「いやいや、これは失礼。しかし、こちらも大事な宝物の番をして戴く人は慎重に選びたいんでね、家人に命じてしばらく様子を見させてもらったのだよ」

ジョンポール氏はへらへらと笑って答えた。ぱっと見には柔和な印象を与える福々しい顔だが、その双眸は強い光を宿す狡猾な商人のそれである。

「君たちが信用できると分かった上で、仕事を依頼したかったのでね」

悪びれた様子のない依頼人に、マーズはすっかり機嫌を損ねてしまった。それ以上食って掛からなかったのは、それでも自制しているのであろう。

「それで、依頼の件ですが」

マーズが口をつぐんでしまったため、マーキュリーが交渉に話を戻す。

「うむ。近頃巷を騒がしておる盗賊のことはご存じだろう。このアビー通りでも何件か被害が出ててな、その盗賊に備えて屋敷の警備を頼みたいのだ。これまでの例では、賊はいずれも夜の間に現れているようだ。昼間は使用人もたくさんいることだし、君たちには主に夜の間の警備をしてもらうことになる。それで――」

ジョンポール氏は一呼吸置いて言葉を継いだ。

「部屋と食事の方はこちらで提供するとして、報酬は一日百フロルでどうだろう」

「……百フロル、ですか」

依頼人の言葉を繰り返すマーキュリー。彼女の声音は冷静だったが、

「……ケチ」

「話にならないわね」

両隣の二人は思いきり不満を顔に出しながらはつきりと口にした。

「百フロルでは、少ないかね」

「当たり前でしょ」口を聞くのも大儀な風にマーズが答える。

ナマズ髭を撫でながらしばし考え込んだ依頼人は、やがておもむろに顔をあげた。

「うーむ……仕方ない、では百二十フロル出そう」

しばしの沈黙。難しい表情で座する依頼人の眉間の縦皺を見つめながら、仕方ない、という顔をす

るジュピター。マーズも渋々妥協しかけた。

その時。

「……残念ですが」

言ったのは、マーキュリーだった。彼女は小さく溜息をつくど、

「その額では、ちよつとお受けできかねますね」

「百二十でも、不満だというのか」

眉をひそめるジョンポール氏。

「残念ながら」

法衣の肩を軽くすくめるマーキュリー。

「しかし、これ以上というのは——」

「……それでは、仕方ありません。私達はこれで失礼させていただきます。他に相応しい方が見つかるまで、お屋敷が盗賊に狙われないことをお祈りいたしております」

マーキュリーは軽く一礼すると、錫杖を手にさつと席を立った。

マーズとジュピターも呆然と彼女に従い立ち上がる。

「まっ、待ってくれ！ ……分かった、百五十フロル出そう。それで文句はあるまい？」

「……確か、シテイの西門近くにも冒険者の店がありましたね。そちらも当たってみられては？」

ひきつった笑みのジョンポール氏に、マーキュリーはにこやかに答えた。シテイの西といえは格段に治安の悪い地区である。そこに門を構える店ならば当然集まる客も柄が悪い。知っていながら彼女

はそう勧めているのである。

「うむう………分かった。では………二百………出そう」

「二百フロル、ですか」

「そうだ。三人で一日二百フロル。ただし、盗賊にまんまとしてやられるようなことがあれば、ピタ一文払わんからそのつもりでいたまえ」

「三人で一日二百フロル、ですね」

マーキュリーは依頼人の言葉を丁寧になぞると、しばし黙考し、やがて

「……分かりました。このお話、お受けいたします」

極上の笑みと穏やかな言葉でそう答えた。

*

夜警を始めて、六日が何事もなく過ぎていった。

そして、七日目の夜。

うわああああああっつつつつ！

真夜中過ぎのがらんと静まり返った館に、ダミ声の悲鳴が突如響きわたった。

ばがん！

続いてドアを乱暴に開ける音。二階の、ジョンポール氏の居室である。定時の見回りをしていたジ

ユピターが階段を駆け上がった。

「なんだ！ 何があった！」

「うわっ……ひいひいっ！ たっ、助けてくれ！」

寢室を飛び出したジョンポール氏。表情は歪み、恐怖におののく視線が宙に泳ぐ。

「どうした！」

「はうあっ、わあ！ くっ、来るな！ 化け物！」

駆け寄るジュピターを、彼は後ずさりながら両手をばたつかせて追い払おうとする。

ナイトガウンに包んだ太めの腹がたぼたぼと揺れた。

「……はあ？」

化け物呼ばわりされ、呆然と立ち止まるジュピター。

「旦那様！」

「なんなの、今の悲鳴！」

「そうしているうちに、二階の別の部屋から執事のマッカートニー氏が、階下からマーズとマーキュリーが、騒ぎを聞きつけ集まってきた。

「わあ！ くっ、くくく来るなあ！」

ジョンポール氏は慌てて背を向け逃げ出そうとする。

「ちょ、っと待ちっ！」

「旦那様！ お気を確かに！」

「ひいぎやあああつつつつ！ ひーっ！ ひーっ！ ひーっ！」

ジュピターとマツカートニーが腕を掴んで止めようとする、ジョンポール氏はますます恐慌し、じたばたと暴れ始めた。

「私が術をかけます。少し彼を押さえていて下さい！」

そう言って呪文を唱え始めるマーキュリー。平静を失った人間を落ち着かせる術である。残り少ない髪をふり乱し、こめかみに血管を浮かべてわめき散らす彼を、ジュピターと執事氏が二人がかりで懸命に押さえた。

「『静心』」

やがてマーキュリーはもがく男の額に指先を当て、祈りの言葉を解き放つ。

男の背中と太い腹がびくんと波打ち、一瞬動きを止めた。

「……やった……？」

固唾を呑んでその様子を見守るマーズ。

「旦那……様？ ……わあ！」

「いや！ 全然効いてな……がふ！」

再び暴れ出したジョンポールの肘鉄がジュピターの顔面にヒットした。

「ちよっと！ こんな時に呪文スカってんじゃないわよ！」

「そんな……いいえ、今のは失敗はしていない筈です！」

「ああもう面倒なオヤジだな、いっそどつき倒そうぜ、こいつ」

「とんでもない！ 旦那様に手荒な真似はおやめ下さい！」

「こんな時にややこしいこと言わないの！ ええ、この際殴り倒しましょう！」

「『静心』の術が効かないとなると……！ そう、もしかして！」

喧噪の中、マーキュリーは再び呪文を唱えると、先刻そうしたのと同じようにもがく男の額に指先を当て、完成した術の力を解放した。

「『解^{キョウ}毒^{トク}』」

ジョンポールは再び太い腹をびくんと波打たせ、瞬間全ての動きを止めると、そのままへなへなと脱力して床に崩れた。

「う……ああ？ 化け物は……？ わしは一体……？」

「……それはこつちが訊きたいね」

肘鉄で殴られた頬をさすりながら、恨めしそうにジュピターが唸る。

「そうです、旦那様。一体何があったのです？」

「何が、って、わしにもさっぱり……確か、トイレに行こうと思ってドアを開けようとしたら突然めまいがして、目を開けたら部屋が燃えていたんだ……そう、火事は！」

「火事なんてどこにも無いわよ」

間髪入れず、呆れたように突っ込むマーズ。

「……それは、幻覚です」

皆の疑問に答えるように、マーキュリーは淡々と言った。

「人に幻覚を見せて恐怖を与えるタイプの毒薬があると、以前聞いたことがあります。『解毒』の呪文が有効だったということは、そのような薬物が何らかの形で使われたのしょう」

「薬？」不安に顔を曇らせる執事氏。

「一体誰が、何のために？………！」

言いかけて、マーズとマーキュリーははっと視線を合わせた。

「……ああっ！」

一拍遅れて気付いたジュピターもあつと息を呑む。

「やられた！」

三人は弾かれたように地下の宝物庫目指して駆け出した。

「あぢゃー……やっぱり」

玄関ホール奥に飾られたチャ・ザ神のタペストリーをはぐると、そこは地下への階段の入口になっていた。いつもは固く閉ざされ、当然鍵も掛かっている筈のその隠し扉が、大きく開け放たれている。

「手遅れ——か、な？」

そう言って覗き込むジュピター。手元の明かりが届くのはほんのすぐそこまで、あとは深い闇のみである。地下の空気がひんやりと頬に心地いい。

「さあ……私達が上にいた時間はそんなに長くありませんから、もしかしたらまだ——」

「とりあえず、行ってみましょう」

そう言ってマーズは呪文を唱えた。

「……『光の精霊、ウィル・オー・ウイスプよ』」

彼女の言葉に応えて光の球が姿を現し、あたりを皓々と照らしはじめる。

「こそこそする必要はないわね、ここ以外に出口はないんだから」

さらに『光明』の魔法をかけたシヨート・ソードを松明代わりに、雇われ番人達は宙を漂いながら先をゆく光の精霊に続いて地下への入口に踏み込んだ。

依頼を受けた三人自身足を踏み入れたことのなかった隠し扉の奥は、しかし少し狭いごく普通の下り階段だった。少々大きくはあるがごく普通の人家であって古代の遺跡などではないのだから、当然といえば当然である。階段は一階分地下に降りると踊り場に突き当たり、左にぐるりと廻ったところで扉に突き当たった。

「……開いてる」

鍵は掛かっていない。掛かっていたのかも知れないが、今は掛かっていない。ジュピターはノブに手をかけ勢いよく開けた。

精霊の光に照らし出されたのは、石壁の小部屋。

革の破れたぼろソファ。

引き手もげて塗装が剥げたワードローブ。

埃だらけのばかでかい壺に、同じく埃に埋もれた木箱の山。

「ここって………宝物、庫………じゃないよ、な？」

頭を押さえながら首をかしげるジュピター。

「んなわけないでしょ、お馬鹿」

マーズの冷たいツツコミに、ジュピターの眉がびくびくと跳ねる。

「まだ、この奥がある筈よ。たぶん、どこかに隠し扉かなんかが」

当のマーズは知らん顔で言葉を続けた。

「――ああ、本当」

その間に、ワードローブの後ろを覗き込んだマーキュリーが声をあげた。ジュピターとマーズも近寄って、見れば衣装棚の背と壁の間に人ひとりか何とか滑り込めそうな隙間があり、壁面には目立たないように造られた小さなドアが。

「通路はこの奥に続いていますね。さ、急ぎましょう」

神官の穏やかな言葉に促され、ジュピターが、続いてマーズが扉をくぐった。

扉の向こうは緩やかな下り坂の通路になっていた。通路は意外に長く、精霊の光でも奥まではよく見えない。

ばたん！

がごんっ！

がらごろがらがたーん！

突然、派手な音が地下の闇に響きわたった。回廊の先である。

三人は一斉に駆け出した。

一本道の回廊を左に折れると、先をゆく光球が開け放たれた扉の形を浮かび上がらせ、近づけば近づくほどさらに奥の様子が目に飛び込んでくる。先刻の物置よりか心持ち広い部屋。奥には柵らしき物に何やら並んでいる。そして。

精霊の光に、きらきらと輝く床。

「うわっ！ 何だあれ！」

ジュピターが思わず声を上げた。

輝く床の正体は、大量の銀貨である。フロリン銀貨が床にぶちまけられ、空になった箱が二つ三つ、部屋の隅に転がっている。三人は銀貨を踏んづけて部屋になだれ込むと、そこにいる筈の賊の姿を探した。

——いない——

誰かがそう口にしようとした瞬間。

ばんっつ！

不意に入口の扉が閉じた。

「しまった！」

振り返るマーズ。その横をすり抜けてジュピターが勢いよく扉を押し開け——ようとするが、開かない。閉じた扉の向こうを、足音が遠ざかる。

「ちっ……このっ！」

もう一度、今度は肩で激しく当たるが、扉はぎしと軋むだけで開かない。

「ジュピター、どいて！」

言ってマーズは早口で呪文を唱え印を切る。ジュピターが慌てて飛び退いたその後に、

『『ファイアー・ボール』
『火炎球』！』

魔術師の掌から放たれた魔力の光は扉の中心の一点に収束し、

どごーんつつつ！

激しい爆発音を伴って頑丈なドアを粉々に打ち砕く。木枠だけが残った戸口をくぐって、まずジュピターが明かりを灯したソードを手に、続いて二人の魔法使いが飛び出して後を追った。

ばんっ

前方で物音がした。先刻通ってきた物置の隠し扉だろう。賊はまだ見失うほど遠く離れてはいないようである。上り坂の回廊を、がらくた部屋を、階段を息もつかずに走り抜け、三人は再び屋敷の中に戻ってきた。

「……いたぞ！」

ここに来て初めてその目で見る賊の姿は、黒装束に黒い覆面。緩やかにカーブする階段を駆け上がる細身のシルエットは女のそれである。

「待て！」

そう言ったからといって相手が待ってくれるはずはないのだが、とりあえずそう叫んで追手たちも階段を駆け上がった。

と、二階の廊下の中ほどのドアが不意に開き、

「なっ……こっ、今度は何事です！」

騒ぎを聞きつけたマツカートニーが廊下に飛び出した。盗賊は華麗なステップで、廊下の真ん中で顔をひきつらせて硬直する執事氏をひらりとかわす。

しかし。

ごぐっ

その後を追ってきたジュピターには、そんな器用な真似はできなかった。

「ぎゃっ！」

吹っ飛ぶ執事氏。

「わあっ、ああ、悪い！」

ジュピターは二、三步たたらを踏んで自分の吹き飛ばした相手の方へ気にはしたが、すぐに向き直って泥棒の後を追った。

「どうした！ 今度は一体なんだと——」

ごっ

「はあうっ！」

顔をのぞかせたジョンポール氏の顔面に、一番後ろを走ってきたマーキュリーの錫杖がヒット。

「ああっ！ ごっ……めんなさい、急いでますので！」

一旦足を止めた彼女も、そう言ってやはり走り去っていった。

そうしている間に、先頭に行く黒づくめの盗賊は廊下の突き当たりの窓の掛け金を外し、ガラス戸を外に向かつてばんっ！と開く。そして、ちらりと一瞬後ろを振り返った後、その身を宙に躍らせた。

「あっ！ このっ、待てっ！」

ダッシュで窓に近づくジュピター。止まる気配はない。

「ジュピター！ 無茶は……！」

「うりゃあーっっっっ！」

マーキュリーが止めるのも聞かず、ジュピターも賊の後を追った。迷わず窓枠を蹴って外に飛び出が。

だんっ！

素人が、しかも金属鎧など身につけて盗賊の真似事をするなど無謀である。

「……んぎぎぎぎぎぎぎぎ……」

とりあえず足から着地したものの、脳天まで痺れるような痛みがジュピターを襲う。肝心の泥棒はすでに庭を横切り生け垣を乗り越えようとしていた。その様子を見咎めたマーズは新たに呪文を唱え印を切る。

「――『飛行』！」

“力あることば”が解き放たれ、不可視の力がマーズの体を包み込むと、彼女は先の二人がそうし

たように窓枠を蹴って表に飛び出した。翼のように夜風をかたどる長い黒髪をうるさそうに後ろに払い、不届きな盗賊の後を追って、若い魔導士は夜の空に吸い込まれるように飛び去った。

「……あの、えーっと……ジュピター、大丈夫ですか？」

三人が次々に出ていった窓を最後に残ったマーキュリーが覗き込む。盗賊もマーズもすでに姿は見えず、残っているのは、

「……んぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ……」

うづくまるジュピターだけである。小さくため息をついたマーキュリーは窓枠によじ登ると何やら身振りとともに呪文を唱え、自分もふわりと飛び降りた。

*

盗賊は北へ向かって走っていた。

逃げ足は決して遅くないが、上空から、それも戦闘馬車並みの速さで追ってくる相手を振りきるのは無理である。細い路地が縦横に走る下町や無秩序に建物が入り組んだスラムとは違い、高級住宅街であるアビイ通り界隈は見通しがよく、うまく身を隠して追手を煙に巻くこともできない。やがて通りは川に突き当たった。

盗賊が橋の中程に差し掛かったその時、空から来た追手は、橋の向こう側にふわりと降り立った。

その左手のショート・ソードに宿る魔法の光が、互いの姿を映し出す。追手の方は、黒のローブに長い黒髪。一目見ただけで卒倒しそうなほどの美形である。横からの強い光が生み出す陰影が、その美しさを一層引き立てていた。逃げる盗賊の方も足先から指先まで黒尽くめ。黒のキャップに、目元を隠す覆面。決して大柄とはいえない体のシルエット、露出した顎のラインと細い首は、間違いない女である。対峙した二人はしばし互いの出方を待って睨み合った。

先に動いたのは、マーズだった。

「『万物の根源たるマナよー』」

呪文の詠唱にあわせて、左手の指輪が光を放つ。

相手も動いた。盗賊はあたりを素早く見回すと、右手の欄干に駆け寄りひらりと飛び越える。

「『光の矢』ー！」

マーズの術が完成し、白い魔力光が盗賊めがけて放たれた。

光の矢は、激しく動く標的をわずかに逸れた。盗賊の頭を掠め、目深にかぶったキャップをはたき落とす。

次の瞬間。

白い光の軌跡の上に覆い被さるように、眩いブロンドの長い髪がふわりと広がった。

「ちっ！」

マーズは狙いを外して軽く舌打ちをし、急いで橋の下を覗き込む。盗賊はわずかな光を照り返して輝く金色の髪を風になびかせながら川面近くに設けられた通路を走ると、手近な排水口の中へともぐ

り込んだ。

ルナル・シテイの地下を縦横無尽に走る地下下水道網。迷路のように入り組んだそこは、この街の裏世界である。

「……厄介なところへ逃げ込んだわね……」

湿気と悪臭に辟易しながら、マーズは魔法をかけたショート・ソードをおさめた。精霊使いである彼女は、ある程度の暗視能力を持っている。こちらの存在を気取られないためにも相手の気配を察知するためにも、明かりは消してしまった方が都合がいい。彼女はできるだけ足音を立てぬよう気を配りながら、静かに水路網の奥深くへと潜っていった。

きゃあっつ！

どのくらい歩いた頃だろうか。遠くから、甲高い悲鳴が微かにマーズの耳に届いた。

声のした方を目指し、駆け出すマーズ。しかし、大都市の地下下水道網はそれ自体が巨大な迷宮である。すぐに水路は分かれ道に突き当たった。耳を澄まし、神経を研ぎ澄まし、微かな水音を感知した彼女は再びその方角に向かって走り出す。

水音が次第に近くなる。

板を渡しただけの粗末な橋を渡って角を曲がったそこが、音の出所だった。

「……っ、このっつ！」

激しい水音に混じって、女の声が聞こえる。

「『光の精霊よ』！」

マーズの呼び出した精霊の光が、皓々と光を放つ。

目の前に現れた光景に、彼女の心臓が跳ねた。

先刻の盗賊とおぼしき女が金の髪を振り乱し、大人二人分はあろうかという巨大なヒルを相手にシヨート・ソード一本で格闘している。

「このっ、離しなさいってばっ！………きゃ！」

突然の強い光に驚いたヒルは体をくねらせて暴れた。見れば、盗賊はヒルの触手に足を絡め取られて水の中に体半分引きずり込まれている。

マーズは続けて呪文を唱えた。

「『闇の精霊よ』！」

明るく照らし出された空間の一角に、黒い球体が出現する。闇と恐怖を司る精霊、シェイドの具現である。闇の精霊はぐにやりと形を変え、マントのように広がったかと思うと、大ヒルめがけて突進しその巨体を包み込んだ。

ばちっという音がして、大ヒルが体を大きく反らす。

黒い塊が消えた後、大ヒルは急に力を失ってそれきり動かなくなってしまった。闇の精霊はこの物質界ではきわめて不安定な存在であり、わずかな衝撃で崩壊してしまうが、その消滅の際に生物の精神に打撃を与えるのだ。

大ヒルの体がぶかぶかと水に浮いて流されてゆくのを見届けて、マーズはまだ肩で息をしている盗

賊に近づいた。

「ほら、手、貸しなさい」

マーズが手を差し伸べると、盗賊は素直にその手をとった。もかくようにして這いあがった彼女の左の足からは、ヒルに咬まれたのであろう、かなりの血が流れている。

「私達を出し抜いた泥棒の割には、随分情けないわね」

マーズは懐からスカーフを一枚取り出し、その傷口をきつく縛りながら言った。

「全くだわ、あたしの負けね……これは返すわ」

盗賊は肩をすくめ、背負い袋を放り出した。中には、宝石を贅沢にちりばめた装飾品類と金塊が入っている。売りさばいてしまえば、少なく見積もっても七、八万フロルにはなるだろう。

「盗ったものはそれで全部よ。さあ、役人に突き出すなり何なり、あなたの好きにして」

そう言って彼女は覆面を取った。人形のような端正な顔立ち。淡いブルーの大きな瞳が、明るいブルンドによく似合っている。

「好きにしろ、って、どうもする気なんて無いわ」

前髪をかき上げながら、大儀そうに応えるマーズ。

「あら、あたしはお尋ね者なのよ。役所に連れていけば賞金もらえるわよ？」

「お尋ね者……『怪盗V』ね」

「お知りおき戴いて、光栄だわ」

そう言って盗賊は満足げに微笑む。人を食ったようなその態度にマーズは閉口した。

「……とにかく。誰にも泥棒を『捕まえてくれ』なんて頼まれた覚えはないしね、契約外の仕事をする気は無いの。そういう訳だから、あなたも逃げるなり何なり好きにきなさい。私はもう帰るわよ。こんな所にいつまでもいるのはごめんだわ」

「ああ、待って——」

盗賊は踵かかひすを返して立ち去ろうとするマーズを呼び止めると、ゆらりと立ち上がった。

「出口なら、この近くにもあるの。あたしについて来て」

「……歩けるの？」

「ええ。血は出てるけど、傷はそう深くないみたい……あ、でも、肩なんか貸してくれると、嬉しいな」

ごく簡潔なマーズの問いに、饒舌に答える盗賊。

「そんなこと言って、油断したところを短剣でぶすり——」

「やあね、命の恩人にそんなことしないわよお」

ころころと笑う盗賊に、マーズは呆れ顔で肩を貸した。

「ありがと……あたしは、ヴィーナス。よろしく」

「名前なんて名乗っていいの？ 盗賊が」

「だって。命の恩人に名乗りもしないなんて、失礼でしょ？」

そう言ってヴィーナスはまた笑う。マーズはこの盗賊のペースに自分もすっかり乗せられているよ
うな気がしながらも、渋々と名乗った。

「……………マーズ、よ」

答える仏頂面を、ヴィーナスは嬉しそうに見つめる。

「さあ、出口はこっちよ……………この先を、右に曲がるの」

黒尽くめの二人はゆっくりと歩き出した。

かたん

どぶ板を持ち上げて二人が再び地上に出ると、そこは繁華街の裏通りらしかった。マーズ達の泊まっていた『青旗亭』も近い。

「それじゃ、私は帰るわ。あんたも、もうこんなへマすんじゃないわよ」

言ってマーズは貸していた肩を離すと、くるりと背を向け、すたすたと歩きだした。

「……………待って！ マーズ！」

そんな彼女を、ややあつて、ヴィーナスが呼び止める。

立ち止まるマーズ。

振り返ると、ヴィーナスは目の前にいた。

盗賊の素早い動作でマーズの懐に飛び込んできたヴィーナスは両腕をついと伸ばし、

彼女の首を抱きかかえ、

唇を、奪った。

「……………！」

不意をつかれて呆然と立ち尽くすマーズ。
次の瞬間我に返った彼女は、

「%?>λ&.:.●○&い√◎▽(株)ちゅ★?@※☆\$△-!」

唇を塞がれたまま猛然と抗議をした。

ヴィーナスは唇を離すと素早く跳びさる。

狼狽えるマーズの反応を楽しむように、うっとりで見つめるヴィーナス。

「マーズ、あたし、あなたのこと気に入っちゃったみたい……」

今夜はこれでさよならだけ。きつと、また、会いに行くから」

彼女はそう言っつて悪戯っぽい笑みでウインク一つ飛ばすと、ひらりと身を翻して夜の街に消えてゆく。風をかたどる金色の残像が、マーズの脳裏に焼き付いた。

柔らかな唇の感触を思い出される度、それを払拭するように首を振りながら、マーズはしばらくその場を動けずにいた。

*

二〇〇×七日＝一四〇〇フロル

とりあえず宝物庫の中身を盗賊から守ることができた三人は、約束通りの報酬を受け取って再び『青旗亭』へと戻ってきた。陽はすっかり高くなつたが昼時にはまだまだ早く、店内のテーブルは奥

の一つと手前一つを除いて空席である。カウンターの方もがら空きで、たった一人陣取った客がマスターを相手に談笑していた。

「……おお、あんたらか、お帰り」

帰ってきた三人に気付いて、声を掛けるマスター。

それにあわせて、彼の前に座っていた客が振り向いた。首を巡らす滑らかな動作にあわせて、腰まである金の髪が波打つ。

「……………っあ！」

最初に反応したのは、マーズだった。息を呑み、足を止め、眼を見開いて絶句する。

客は、マーズの姿を見つけると、大きな青い瞳に歓喜の表情を浮かべた。

「お帰り、マーズ」

「あ、あんた！ どうして！」

名を呼ばれて、呪縛を解かれたように声をあげるマーズ。柄にもなくその声が入り込んでいる。

「知り合いですか？」

「うっ……………まあ……………ね」

マーズの問いに他意はなかったが、マーズの返事は歯切れが悪い。

ヴィーナスはその表情に悲しげな陰をほのかに滲ませ、肩にかかる髪を払いながら、高い椅子から立ち上がった。

「まあね、なんて、つれないのね。あたし達、あんなに熱いキスマで交わしたのに」

びきっ！

「えっ」

「おっ」

凍り付くマーズに、視線を向けるジュピターとマーキュリー。

「つばっ、馬鹿言わないで！ あれはあんたが勝手に——その——」

言いかけてマーズは自分の発言が肯定になっていることに気付き、口ごもる。

そんな彼女を、ヴィーナスは淡い笑みを浮かべた瞳で甘く見つめた。

「あの夜、ほんの一時のことだったけど。」

マーズ、あたし、あなたの温もりが忘れられなくて、あなたを捜してここまで来たの」

「ええっ！」

「おおっ！」

「なっ、ちょっ、ヴィーナス！ あんたねえっ！……」

「あら、本当のことよ」

そう言ってヴィーナスはついとマーズの間合いに踏み込むと、彼女の左肩に手を掛けて頬に軽く口づけた。

「！◎▽(株)¥★\$Σ@！」

眉をひきつらせながら頬に手を当て、意味不明の唸り声をあげるマーズ。ヴィーナスは、人差し指をぴっと立てて悪戯げな表情でウインクを飛ばした。

「……………いったでしょ？ あなたのことに気に入っちゃった、って。

ま、そーいうわけだから。これから、よろしくね」

「こっ、これから、って……………あんた私達についてくる気なの!？」

復活したマーズが語気を荒げる。

「うん☆」

「……………」

少しも悪びれたところのないヴィーナスに、マーズはそれきり黙ってしまった

——ように、見えた。

小さな低い呟きにあわせて彼女の右手がすいと持ち上がり、指先が複雑な動きで空をかき混ぜる。

「はっ！ ……だっ、駄目よマーズ！ 町中で魔法は御法度です！」

気付いたマーキュリーが慌ててその手を押さえた。

「いいから離して！ こいついっぺん焼き殺してやるんだから！」

「うわっ馬鹿っ何考えてんだ！ いーから頭冷やせ！」

それでも暴れるマーズをジュピターが後ろからはがい締めにする。

「馬鹿とは何よバカとは！ あんたに言われたかないわよ！」

「なにい！」

「ささ、せっかく仲間になったんだから、お祝いしましょ♡

マスター！ グラス四つに、葡萄酒一本あけてちょうだい！」

本当に悪びれた様子のかけらもないヴィーナスはカウンターに駆け寄ると、至極陽気に声を掛けた。

「とにかく落ち着いて下さい、マーズ！」

「これが落ち着いていられる！ って痛いわね、離しなさいよこの馬鹿力！」

「やかましい！ いい加減カッカすんのはやめろ！」

「そうです、いくら一夜の過ちとはいえ、責任はちゃんと取らないと」

「くおら！ 誰が一夜の過ちよ！ 勘違いしないで！」

「なあ、あんたら……店の入口であんまりもめないでくれるか……」

そろそろ昼時、『青旗亭』もそろそろ客の入りが増え始める頃だった。

——おたから攻防戦・終

セーラームーンRPG② おたから攻防戦

著 深森薫

表紙 飛鳥圭

1999年 1月 初版発行

2023年 4月 PDF化にあたり加筆修正

発行者 Bitter & Sweet (深森薫)

<http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/>